

石郡英一の

“老話”

介護職に聞いてほしい
高齢者と家族の物語

第9話 (最終回)

逝きざま

いしこおり・えいいち

日本福祉介護総研株式会社代表取締役会長。医療・介護運営教育コンサルタント。看護師／救急救命士。学校法人美芸学園理事。病棟看護長、老健管理部長、身体障害者療護施設事務長を経て、介護保険施設などの運営教育コンサルタントを行う会社を設立。役者かと思うほどの演技とユーモア、現場の方が、思わずうなずいてしまう体験を豊富に持っている人気の講師。主な著書に『介護現場の困ったスタッフを戦力に変える指導法』『医療依存度の高い高齢者のケア』『身体機能の低下した重度利用者のケア』『石郡流 施設看護師のデキる仕事術』（いずれも日総研出版）がある。

1. 里の人生

(1) 臨終

ペンライトで瞳孔反射がないこと、聴診器で心音の聴取ができないことを確認すると、医師はおもむろに腕時計に目をやった。

「20時46分、ご臨終です」

淡々とそう告げると、初めて玲子に顔を向けた。

「ご愁傷さまでした」

医師があいさつすると、医師と看護師はそろって玲子に頭を下げた。

1971年1月18日の夜、玲子の母・里が病院で息を引き取った。

死因は、入浴中の脳卒中による溺死。風呂から1時間経っても上がってこない里を怪訝に思った玲子が浴室を覗いたところ、身体が丸まった状態で湯船に沈んでいる里の姿を発見した。

玲子は急いで救急車を呼び、里は家の近くにある病院に運ばれたが、時すでに遅かった。

(2) 里の生き様

川上里は1896年1月に東京都神田駿河台で生まれ、75歳でその生涯を終えた。父親は軍人で、里が出生する前年に日清戦争で戦死したため、里は母親の実家である、神田駿河台にあった書店を営む佐藤家で育てられた。佐藤家は書店の収入と川上家から支給される恩給によって生計を立てていた。

里は尋常小学校を卒業後、16歳の頃より佐藤書店を手伝うようになった。その頃、神田にはいくつかの大学があり、店番をしている里は多くの学生たちと交流した。里はそんな中、書店に訪れた当時大学1年生の川上和博に見初められた。その後、大学を卒業した後に高等学校高等科教師となった川上に求婚され21歳の時に結婚。

結婚後二人は、里の実家に近い神田小川町に家を借りて生活を始めた。

里は、23歳の時に長女を出産し、その後、25歳と27歳の時に、2人の男の子を出産する。長女は美しい子に育つよう玲子

と名付けられ、弟たちは和博の1字ずつを受け継ぎ、和己と博史と名付けられた。

里は教師の妻として種々の付き合いや家事をこなし、また子どもたちの母親として、子どもを書物に馴染ませ、愛情豊かにしつけ、その姿は世間の人から良妻賢母と崇められた。

両親の愛情に包まれて、川上家の子どもたちは素直に育っていった。

長女の玲子は、高等女学校を卒業後、家事手伝いをしていたが、20歳になった時、5歳年上の山田隆と見合い結婚をした。結婚後1年で男の子を授かり義雄と名付けた。

長男・和己と次男・博史は、二人とも高等学校高等科を卒業後、東京帝国大学へ進学し、勉学に励んだ。

和博はその頃、高等学校高等科教頭に就任し、川上家の行く末は順風満帆のように思われた。

ところがその幸せな暮らしも、太平洋戦争が始まると瞬く間に壊されていった。

1942年に和己が21歳で徴兵され、翌年には博史が20歳で徴兵された。

息子たちの出征の際、里は、多くの教え子を戦場へ送り出した夫の責務や、戦禍に喘ぐ世間の目を慮った。

「武運長久を祈ります」

和己の時も博史の時も、里はそう告げると笑顔で手を振り、

涙も流さず気丈に振る舞った。

しかし里の願いは届かず、1944年6月に和己がサイパンで、同年8月には博史がグアムでそれぞれ戦死したとの知らせが届いた。

二人の戦死の知らせにも里は、我が子の戦死の悲しみをも押し殺し、涙も流さず気丈に振る舞った。

弟たちの戦死の知らせに涙を流す玲子に対して、里は諭すように話した。

「玲子、人はいつか必ずあの世に逝きます。どうあの世に逝くかという、その逝き方こそがその人の真の生き様なのです。和己と博史は私たち家族のみならず、日本国民の命をも守る逝き方をなさいました。その生き様は御霊として尊ばなければなりません」

玲子は、自らも母としての立場で、我が子に置き換えて考えてみたが、考えるだけで身の毛がよだつ思いがした。

1943年11月から、任意の人口疎開に伴い、和博の指示で、里と玲子と義雄は和博の兄が農家を営む福島へ疎開し、和博と隆は東京に残った。

その翌々年、1945年の3月、東京を襲った大空襲以後、東京に残った和博と隆からの連絡は途絶えた。

しかしその時も里は、「安心しなさい。お父さんたちは必ず生きています」と玲子と義雄に対して気丈に振る舞った。

1945年8月15日、終戦を伝える玉音放送を、三人は疎開先である和博の兄の家の庭先で耳にした。

「朕深く……臣民ニ告ク（私は国民に申し伝える）……帝國臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及其ノ遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク（日本国民であって前線で戦死した者、公務にて殉職した者、戦災に倒れた者、さらにはその遺族の気持ちに想いを寄せると、我が身を引き裂かれる思いである）……」

玉音放送を聴き終わると、里は身体の支柱が崩れたように突然地面に座り込み、今まで胸の奥にしまい込んできた悲しみや失意を吐き出すかのように辺り構わず泣き崩れた。

その時玲子は、玉音放送の終戦の知らせに安堵したが、気丈な母と思っていた里の泣き崩れている姿を目のあたりにして、「これからは私が母を支えなければいけない」との思いを強くし、里の悲哀に涙した。

2. 玲子の生き様

終戦後しばらくして、玲子は和博と隆を探すために、背負えるだけの食料と水をリュックに詰め、里と義雄を疎開先の福島に残して一人東京に戻った。しかし、そこで玲子が目にしたのは、あまりにも変わり果てた東京の姿だった。

玲子は太陽の軌道でおおよそ

の地理的見当をつけ、昔の記憶を頼りに、道行く人に尋ねながら、神田の自宅へと向かった。

玲子は道中、瓦礫の山となった焼け野原から行方の知れぬ二人を探すのは、困難なことのようにも思えたが、この冷静な思考とは裏腹に、里の思いをも背負った「何としても会いたい」という強い感情^{おもい}が玲子を突き動かしていた。

神田の街と思われる地に入り、何人かに声を掛けたが、二人の行方は見当もつかなかった。そのうち夕暮れとなり、休む場所を探しながら一人の男性に声を掛けた。

「あの…お尋ねします…。この辺りに住んでいた川上和博と山田隆という男性に心当たりはございませんでしょうか？」

声を掛けた男性は、はっとしたような顔をして玲子を見つめた。

「川上先生をご存じなのですか？ えっ！ 山田君もご存じなのですか？」

「はい。私は川上の長女で山田玲子と申します。山田隆は私の夫です」

そう答えると、男性の表情が一変した。

「えっ!? 川上先生の娘さんで山田君の奥さんですか!! 私は川上先生の教え子で山本洋一と申します。山田君とは役所時代の同僚で、お二人には本当に世話になった者です！」

山本の人懐っこい笑顔とソフ

トな語り口、さらには父と夫に感謝の意を示す山本の言葉に、玲子は初対面ということも忘れ、藁をもつかむ思いで、二人の消息の有無や後先を考えず東京に戻ってきた事情などを山本に話した。

「そうですか…。お二人を探して疎開先から着の身着のままに戻って来られたのですか…。私もお二人は生きていますと信じていますが、残念ながらお二人の消息は存じ上げません。お泊りになる場所がないのなら、しばらく私のバラック小屋で休まれたらいかがですか？ 私も戦禍で家族をすべて失くしました。失意の中で、奥様に出会えたのも何かの縁です。天は私に、先生や山田君に恩返しをするよう命じているのかもしれませんが。よろしければ、お二人がお戻りになるまで、奥様の力にならせてはいただけませんか？」

そう、山本は玲子を支援したいと名乗り出た。玲子は渡りに船とばかりに、恥も外聞もなく、この申し出を受け入れた。

山本は役所時代に築いた人脈なのか、戦後商工省で働いていたため、ある程度の物資を手にすることができるようで、玲子はしばらくの間山本と一緒に暮らし、昼間は父と夫の消息を訪ねて回った。

山本のお陰で、玲子は自らの生活を建て直すと、里と義雄を東京に呼び戻した。

その後も山本は、玲子の家の

世話や、戦後3年が経過しても消息不明な和博と隆に区切りをつけ、里や玲子の恩給の受給手続きを行い、さらには里を元気にするための玲子の願いであった書店の再建など、玲子の家族の再建を手助けした。

その甲斐あって玲子は、1951年神田駿河台に「佐藤書店」という、当時の店名と同じ名前の書店を再開することができた。里は佐藤書店の再開と共に徐々に元気を取り戻していった。その時里が55歳、玲子が32歳、義雄が11歳の春の出来事であった。

その後も玲子一家は、山本の力を借りながら、書店経営と恩給によって、幸せな暮らしを送れるようになった。

3. 里の逝き様

(1) 決意

1955年1月、里が60歳になった月の誕生日に、玲子は山本と義雄の三人で里の還暦を祝った。

玲子と山本と義雄の祝福を受けた里は、玲子に今の気持ちを問われて意を決したように口を開いた。

「本日は還暦を祝っていただき本当にありがとう。あの忌まわしい戦禍を逃れて還暦まで生きてこられたとは正直驚いています。1945年の玉音放送を聞いた時、私の心を支えてきた全ての柱が崩れていきました。それからはずっと玲子と山本さん、そして義雄に支えられて生きてきました。玲子が私を励まそう

と、山本さんのお力をお借りして、私が幸せだった頃のこの書店を再建していただき、言葉では言い尽くせないほど感謝しています。しかし還暦を機に、この書店から身を引かせていただきたいと思っています」

「お母さん！ この書店の再建はお母さんの長年の夢だったじゃないの！ 何も遠慮することないのよ」

玲子がそう云うと、里は玲子の気遣いを制するように軽く右手を上げ、話を続けた。

「私にはやらなければならないことがあるのです。覚えているかしら…。義雄が小学校5年生の時、家族や近所の人に聴いて、反戦を主題にした作文を書きなさいという宿題が出たことを…。あの時、私は義雄に何も話してやれませんでした。同時に、自分の心を閉ざし、忌まわしい過去を封印しようとしていた愚かさに気付かされました。私の一番の罪は、愛する我が子を、戦地に……激励し、かつ笑顔で送り込んでしまったことです……。その罪は、私の心から消えることはありません。どうしてあの時、『どうか生きて帰って』と抱きしめてやらなかったのか……うっ、うっ」

里は目を覆って嗚咽し、震える声で続けた。

「ですから私は…生涯を懸けて、その罪を償っていかねばならないのです……」

「償うって？」 玲子の問いかけ

に里は話を続けた。

「私は残りの人生、語り部をして生きていこうと思っています。私は自らの戦争体験を語ることで、生き恥を曝し、和己と博史の御霊に償っていかねばならないのです。そうしなければ、私は安寧に黄泉の世界に逝きません。どうか私の最後のわがまを聴き遂げてください」

里は玲子に深々と頭を下げた。

(2) 語り部

「……和己、博史、どうか愚かな母をお許しください……。私の戦争はまだ終わってはいません。私の生命が朽ち果てるまで、そしてこの世の中から戦争の火花が消えてなくなるまで、私はこの口で“口撃”し続ける覚悟です。本日はご清聴ありがとうございました」

1時間の話を終え、里が深々と頭を下げると、小学校の体育館に集まった1,500人を超える小学生の拍手に包まれた。

1971年1月18日、その日は地元の小学校での講演会だった。

里は、語り部の活動を始めて15年が経過し、75歳になっていた。里の語りは多くの人の心を打ち、口コミで話題となり、テレビや新聞で取り上げられるようになっていったため、月に20本以上の講演依頼が舞い込むようになっていた。

里は、講演会に引き続き、教頭先生が主導で行う小学生からの質問事項に答えた。小学生はもう全員が戦争を知らない世代

である。

「川上さんは、自分の子どもを笑顔で戦争に送り出したって言われましたが、戦争が好きだったのですか？」小学2年生の男の子の質問に会場がどっと沸いた。「嫌いでしたが、好きと云わなければならない時代でした」

「嫌いなのに好きって云うのぉ～？ 川上さんは嘘つきなの？」

「昔は嘘つきだったのかもしれませんが。でも今は正直ですよ」

「それじゃあ、今日の話は昔の話だから嘘の話なの？」

「いいえ、嘘をついたという本当の話です」

「よく分からないけど、分かりました」男の子が面倒くさそうに答えると、再び会場がどっと沸いた。

ある程度の質問に答えると、里は体育館の壇上を後にした。壇上を降りる時、里の隣には里の身体を支える玲子がいた。

玲子は、70歳を超えた頃から足元がおぼつかなくなってきた里が心配で、語り部“川上里”のそばに付き添うようになっていた。

その日、玲子が運転する帰りの車の中で、里は上機嫌だった。「玲子ちゃん、今日質問してくれた男の子、和己の小さい頃にそっくりで可愛かったわ」

「そう？ 和己に似ていたかなあ…。私はあの男の子とお母さんの掛け合いが楽しかったわ」「和己と博史はいつお迎えに来してくれるのだろうか？」

「お母さん、変なこと云わないでよ」

「昔、和己と博史の訃報を聞いた時、私あなたに云ったよね。“どうあの世に逝くかという、その逝き方こそがその人の真の生き様なのです”と…。今日の語りではないけれど、私の逝き方は懺悔しかありません。生き恥を曝し、語り続けることが私の生き様です。和己と博史にこの懺悔を認めてもらえた時、黄泉の国へ逝けるのだと思います。私はまだ許してもらえないから黄泉の国へ逝けないのです」

(3) 逝く

その日、家に帰ってからも、里は機嫌がよかった。里が晩酌がしたいと云うので、18時から鯛を肴に酒を酌み交わした。1時間もすると二人で4合の日本酒を開けていた。

「お母さん、明日も朝早いから、先にお風呂に入ってね」

玲子が里を入浴へと促すと、里は素直に従った。

玲子は里が浴室に入るのを見届けると、おなかを空かして仕事から帰ってくる義雄の食事作りに取り掛かった。玲子は、お酒が入ったせいか少し身体がだるくなり、手軽に調理できるカレーを作り終わると、しばらく食卓のいすに腰掛けて転寝した。

少しの間休んでいると、「ただいま！」という元気なあいさつが聞こえてきて、義雄が玄関から

一目散に食堂に駆け込んできた。 : 行き、中にある里に声を掛けた。 : 「ご愁傷さまでした」
「母さん今日の晩御飯何？」 : 「お母さん！ 随分と長風呂ね」 : 医師があいさつすると、医師
義雄は手洗いを洗面所で済ま : 玲子が呼びかけても、里から : と看護師はそろって玲子に頭を
せると、玲子が盛り付けたカ : は返事がなかった。 : 下げた。
レーを食卓に座っておいしそう : 「寝ているんじゃないでしょうね」 : 臨終を告げられた里の顔は、
に食べはじめた。 : そういつて玲子が浴室の扉を : にっこり幸せそうに笑っている
「あれ？ お婆ちゃんは？」 : 開けると、湯船に沈んだ里の姿 : ように見えた。
時計の針は20時を少し回っ : を発見した。 : 『和己、博史ありがとう……。お
ていた。 : 「お母さん！！ 義雄、大変！！ : 母さん……。ようやく許してもら
「あっ！ お風呂だ！ 今日は随分 : 救急車を呼んで！！」 : えただね……。』
と長風呂だわ」 : 玲子の叫びが家中に響きわ :
玲子はそうつぶやくと、浴室に : たった。 :